

ハイフレックス授業のすすめ

2020年度にオンライン授業が開始された当初は、学生や教員から対面授業の再開を待ち望む声も多く聞かれていました。しかし一方で、オンラインであれば大学に通学する必要がないことや講義動画を倍速再生で視聴することで時間を効率良く使えることに利点を感じている学生もいて、実際に大学生・大学院生は、対面よりもオンラインでの受講を希望する学生が多いという調査結果もあります^(*1)。また、肝心の成績もオンライン授業の方が成績が上がったという報告もあります^(*2)。そこで今回は、対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイフレックス授業についてご紹介します。

ハイフレックス (HyFlex : Hybrid-Flexible) 授業とは、対面でもオンラインでも学生が好きな方法で受講できるように実施される授業のことです^(*3)。オンラインでの授業は、遠隔会議システムを活用した同期型のものだけでなく、講義を録画してオンデマンドで視聴できるようにした非同期型のものも指します。昨今、オンライン授業が一気に広まった結果、これからの授業形態として注目されています。ハイフレックス授業の利点と負担をまとめてみました (右表参照)。教室で受講する学生のことだけを考えればよかったのが、さらにオンラインで受講する学生のこととも考慮しながら教えるのは教員にとって負担となりますが、2020年度のオンライン授業での経験を活かすことで、比較的負担が少ない方法でご自身の授業への導入が検討できるかもしれません。

昨年度のオンライン授業から対面授業が再開される際にLT開発室の教員の一部授業でハイフレックス授業を実施しました^(*5)。具体的には、教室での授業をCollaborateを使ってオンラインでも受講できるように

し、Collaborateで授業を録画することで非同期での受講にも対応しました。CollaborateやZoomのようなシステムを活用することで、オンライン授業の延長で比較的容易にハイフレックス授業に移行可能なことを実感しました。教室でなければできない学習活動のオンラインでの代替を検討する必要があったり、非同期の授業では学習進捗に気を配る必要があるなど注意する点もありましたが、学生は複数の方法で受講できることを好意的に捉えていました。今後の授業方法の選択肢の一つにハイフレックス授業も加えていただければと思います。

表 ハイフレックス授業の利点と負担

	学生	教員
利点	<ul style="list-style-type: none"> ● 受講機会の増加 ● 対面での出席に縛られない柔軟なスケジュール管理が可能 ● より充実した (オンライン) 教材による学習 	<ul style="list-style-type: none"> ● 同じ時間、同じ教材でより多くの学生に授業を実施可能 ● 対面授業を実施しながら、オンライン授業のスキル、経験の蓄積 ● 対面でできない場合でもオンラインで授業を実施可能
負担	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習方法に関する管理 (特にオンライン授業での時間管理) ● オンライン授業に参加するためのスキルと学習環境 	<ul style="list-style-type: none"> ● 対面でもオンラインでも実施可能な授業設計 ● 対面とオンライン、どちらの学生にも授業を実施することの技術的な複雑さ ● 様々な方法による授業での学生の取り組み状況や学習進捗等の管理

※ Brian J. Beatty : Hybrid-Flexible Course Design, Implementing student-directed hybrid classes^(*4)を元に作成

(*1) 情報通信白書令和3年度版 : <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd122230.html>

(*2) 西出 崇 : コロナ禍における授業のオンライン化の教育に対する影響検証の試み:一成績分布の変化とその要因の検討一, 大学情報・機関調査研究集会 論文集, 10(0), 54-59, 2021.

(*3) 渡辺 博芳 : ペタ語義 : ハイフレックス授業, 情報処理 62(3), 135-135, 2021.

(*4) Brian J. Beatty: Hybrid-Flexible Course Design, Implementing student-directed hybrid classes. <https://edtechbooks.org/hyflex>

(*5) 渡辺 博芳, 宮崎 誠 : 「情報基礎」におけるハイフレックス授業の実践例, 研究報告コンピュータと教育 (CE), Vol.2020-CE-157, No.8, 1-6, 2020.

LMS活用事例レポート

文章表現法1,2での活用例



今回は、理工学部リベラルアーツセンターの牧野悠先生にお話を伺います。

LT どのようにLMSを使われているのでしょうか。

牧野先生 文章表現法1, 2という科目で使っています。理工学部の

全学科、地域経済学科の1年次の科目で、前期、後期の1年間でアカデミックライティングのスキルを身に付けることを目指しています。理工学部については、必修科目となっており、250名程度の履修者に対して、専任教員1名、非常勤講師3名の体制で授業運営しています。

もともと、授業のスライドをコースに掲載して学生に見せていました。2020年度のコロナ禍でのオンライン授業の実施を境に、以前は授業の担当教員・クラスごとに分かれていたコースを1つにまとめて、課題レポートの提出とそのフィードバックを電子的にするようにしました。

LT どのような目的でしょうか。

牧野先生 科目担当教員のほか関係する教員によるチームティーチングが狙いです。課題レポートの提出状況を共有することで、専任教員が非常勤講師の指導をバックアップする環境を整えました。提出されたレポートへのフィードバックについては、教員間で共通のルーブリックとフォーマットを用いることで、学生に対して評価にばらつきのないようにしています。さらに、レポート提出が滞っている学生の情報を、各学科の教務委員や学年担任などの関係教員に適宜伝えられるようになりました。結果として、学生の授業満足

度の向上が見られました。

LT 課題の提出状況をLMSの成績管理で把握して指導に役立てられているんですね。他にはどのような使い方をされていますか。

牧野先生 オンライン授業では、受講生のネット環境・使用デバイスに不安があったので、10分程度の音声教材を毎授業で作成して配信しました。毎回、授業の最初に聴くように指示をしておき、授業が楽しく、退屈せずに受けられるため、ラジオ番組風のテイストを出す演出を加えました。すべて台本を書いた上で録音し、オープニングの曲の挿入、NGテイクのカット、部分的にエコーをかけるなどの編集をしたので、10分の音声の制作に2時間程度かかりました。回によってはゲストの先生を招いたこともあります。これらの音声教材の提供も、授業満足度に繋がっていると思います。

LT 実際の音声を聴かせていただきましたが、本物のラジオ番組のようで、とても丁寧に作り込まれたことがわかりました。今後は、どのようなことをお考えでしょうか。

牧野先生 働き方改革でしょうか（笑）。現行の教員スタッフ体制ではフィードバックの負荷軽減が課題となっていますので、その辺りを改善できればと思います。

氏名(姓)	氏名(名)	第2回課題「同じものを作成せよ」	第3回課題「キーワードを集め、問いを立てる」	第4回課題「文献・論文検索演習」
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(1.50)	✓(1.50)
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(2.00)	--
氏名	氏名	✓(2.00)	--	✓(1.50)
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(2.00)	✓(2.00)
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(2.00)	✓(1.50)
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(3.00)	✓(1.00)
氏名	氏名	✓(2.00)	✓(2.00)	✓(2.50)

図 文章表現法2でのLMS成績管理画面の例

LMS Tips

- ◆ LMSから「Teams会議」を利用する
- ◆ LMSショートカット機能「コースリンク」の活用

※上記のTipsをクリックすると詳細が開きます

Tipsは帝京大学LMSサポートサイトからご覧いただけます。（<http://www.LT-Lab.teikyo-u.ac.jp/lms-ss/>）

編集後記

新型コロナワクチンの3回目接種が各自治体で開始され、手元に接種券が届いた方もいらっしゃるのではないでしょうか。副反応で40℃以上の熱を出した主人は「3回目か…」と及び腰！私自身は副反応が少なかったため、早めに接種したいと考えています。入試や卒業式、入学式など人と会う機会が増える時期ですし、対策をとりつつ、少しでも安心を！（渡部）

